

シヨーパーペンハウエル「恋愛の形而上学」の研究(中)^{註一}

石 塚 勝 雄

八(註二)

前節では、シヨーパーペンハウエルが世界の根柢と見た「生きんとする盲目的意志」(Blinder Wille zum Leben)の立場から恋愛を説明した。本節では、それを更に変曲的に詳論し、つぎには彼の遺伝論を述べたり、プラトンのイデア論の立場から説明したり、恋愛の激情の強弱の生ずる所以を説いたり、種々のことが例の如く波打ちながら述べられている。先ず、その変曲的な繰り返しとは次の通りである。

『結局、性を異にする二つの個体をして、他を排して、かように強く相互に牽引せしめるものは、種類全体のうちに見われた「生きんとする意志」に外ならない。この意志は今や、二人の間に生るべき個体のうちに、意志それ自らの目的に適合した・自己の本質の客観化を、最早予見しているのである。』^(註三)

次に、この生るべき新個体(新生児)は『父からは意志即ち性格を、母からは知力を得、体質は両者から受けるであらう。』と述べる。これは彼の持論であり、この「恋愛の形而上学」の直ぐ前の章である第四十三章は「特質の遺伝」と題し、その中で実験科学的根柢をも挙げて詳論している。この彼の持論は自信あるものの如く、私達が異性を好愛し選択する際の標準としても、後述の箇所で援用されているのであるが、遺伝学の領域に属することでもあり、しばらく与えられたる前提として論を進めて行くこととする。

次は、恋人同士の間の激情の真相は説明できないと云う。その根柢は人間一人一人の「個性」なるものが説明し尽

すことをゆるさない神秘性を蔵していることは多くの人の承認する事実であり、それはその個人を生んだ両親の恋愛の神秘性に照応し、その発露であるからであると云う。さて、その発露の過程を彼は次の通り述べる。

『新個体（新生児―筆者）の成立の端緒、その生命の眞の発生点として目されるべきものは、實際は両親が互に相愛し始める瞬間である。英語の非常にうまい表現を用いると、「互に好き」(to fancy each other)始めた瞬間がそれである。すでに述べたように、二人の憧憬的な眼差しが、相会い相附着した時に、新個体の最初の萌芽が生ずるのであるが、この萌芽も勿論、他のすべてのものの萌芽のように、大抵は踏みにじられ、ものにならないで終るのである。』

以上の説明はいわば時間的・科学的であるが、今度は更にその根源にさかのぼって純粹形而上学的に説明する。すなわち普遍妥当的な・永遠絶対の形而上的實在とされるプラトンの「イデア」論を持ち出して次のように述べる。(註四)

『この新しい個体は、云わば一つの新しい（プラトンの）イデアであって、凡べてのイデアは、因果の法則が、彼等の間に分与する物質を貪ばりとらえて、非常な焦燥（Hefigkeit）をもって、現象として現われ出ようと努力するものであるが、人間の個性を持つこの特殊なイデアも、同様にまた最大の貪欲（Gier）と焦燥とをもって、現象界に自らを実現せしめようと努力する。この貪欲・この焦燥こそ、未来に両親となるべき恋人同士の間での激情である。』

こゝでは、恋人同士の激情の程度に差を生ずる理由の説明である。先ず、その両極端は「地上の愛」(Agapōtē *παρθένος*)と「天上の愛」(Agapōtē *ουρανια*)と名づけて差支ないが、本質的には全く同じものだ^{と云}っている。しかし程度に差が生ずるのは、激情の個性化から来ると、次のように説明する。

『しかし単に程度の上から見ると、この激情が個性化されておればおるほど——換言すれば、愛される方の個体が、その一切の部分と性質とによって、愛する方の個体の願望や、その個性によって確立されている要求などを

充たすのに、最もよく適合しておればおるほど、——激情はいよいよその力を増して強くなる。』

かくして、激情がその度を高めて行く過程についての詳論は、後節にゆずるとして、彼はここでは序論的・概論的に述べる。先ず第一段階として恋愛が根本的に向けられる方面は『健康・力・美・青春』であるという。これらは、つまり、身体的方面といえよう。その理由は『意志があらゆる個性の基本である人類種族の特質を現出させようと努めるからである。』という。これが日常平凡の情事（前述の「地上の愛」）の段階だと彼は言う。次の段階は、更に特殊の諸要求（その各々については後に詳論している）が結びついて、それらが満足されることによつて恋愛の激情の程度が高まる段階であつて、その過程の説明は彼によれば次の通りである。

『兎に角これらの要求と共に、——これらが満足さるべき見込のある場合には、——激情はますますその程度を高めて行く。しかしこの激情が最高の程度に上るのは、二個の個性が相互によく適合する時である。この適合によつて、父の意志即ち性格と、母の知力とは、互に相結合して、個体をここに完成する。この個体こそは、種族全体の中に現われている一般的の「生きんとする意志」が、憧憬するものである。この憧憬は意志そのものの宏大さに相当するものであるから、従つて死すべき個人の心の尺度を踏み超えているし、憧憬の動機もまた、同様に個人の知力の範囲を超えている。それ故、これこそ真の偉大なる激情の靈ゼレなのである。』

つぎに、そのような云わば宇宙大の恋愛は、実際には世の中に稀であるにもかかわらず、万人がよくそれを理解し得る所以を巧妙に次の如く述べる。

『由来世の中に全然同一な個性は二つはないから、どの特定の男にも、或る一人の特定の女が——産み出さるべきもの（新生児）にいつも関係して——最も完全に適合するに違いない。このような二つの個性が相逢うことは甚だ稀れであるが、それと同じく真に激情的な恋愛も、世に稀れなものである。しかしこのような愛の可能性は、何人の心のうちにもあるから、詩的作品において、このような高度の愛が描かれても、私たちは理解し得るのである。』

つぎに、二つの特殊な場合を述べる。第一の場合は、二人の立派な教養のある男女間に、心状・性格・精神的傾向が一致しているために友情 (Freundschaft) が成立しているのに、恋愛 (Geschlechtsliebe) が湧かない場合である。これに対するショーペンハウエルの説明は、若し彼等が結合して子供を生むならば、その子供は肉体的または精神的に不調和な特質をもつことになって、種族の中に自らを現わしている「生きんとする意志」の目的に適合しないからだと考えるべきだ、としている。第二は、前と正反対の場合であって、二人の心状・性格・精神的傾向が質を異にしているために、嫌悪したり更に敵視するほどになっているにもかかわらず、性愛 (Geschlechtsliebe) ここでは性愛と訳さないと意味がとりにくい) が生ずる場合である。この場合は、性愛そのものが上述の相異点について二人を盲目にするから、性愛にそのかされて結婚でもすれば、非常に不幸な結婚となるであろう、と彼は云う。しかし、ショーペンハウエルの哲学体系からすれば、この場合二人の結婚は不幸であろうとも、生れる子供は種族の意志に適合したものとなる訳である。このことについては後述される。

(註一) 本論集第五卷第三号四七頁に続く。

(註二) Eduard Grisebach, Schopenhauers Sämmtliche Werke, (Reclam) Bd. II, S. 1329 ff.

(註三) 本論(上)三二頁、(註三)参照。

(註四) ある学者の説によれば、ショーペンハウエルの哲学は、カントの認識論、プラトンのイデア論、吠陀の汎神論、及び厭世観の結合であるとされるが、その中の一つである。彼の哲学においては、イデアも「生きんとする盲目的意志」も物自体も結局は同一の形而上の実体を指すと見てよいであろう。

九(註一)

前節まではショーペンハウエル恋愛論の云わば序論であって、本節から本論に入る。彼は恋愛感情及びそれにまつ

わる異性選択などを、すべて一種の妄想（錯覚）と見、さらにそれを本能的なものとして、その形而上学的体系をつぎのように述べる。

『一体、自己中心主義は、一切の個性にわたって一般的に存在する根深い性質であるから、或る個人の活動を呼び起すためには、利己的な目的を見せるのが一番よく、こうすれば最も確実に奏効すると考えて差支ない。（中略）個体が種族の持続や特質のために活動しなければならぬ場合とか、或いはそのために犠牲を払わなければならない時に、その事件の重要な所以を知力に充分に理解させ（知力は個体の目的のみを考えるように出来ているから）、これによって個体が事件の重要性に適應して活動するように仕向けることは決して出来ない。それ故に、こうした場合には、自然は次のような手段を講じて自己の目的を達し得るにすぎない。すなわち自然は個体に或る種の妄想（Wahn）を植え込み、その妄想の力によって、実際は種族のためにする事をも個体自身のためになる事のように思わせるように、仕組むのである。そのために、個体自身は自己に尽していると思うのだけでも、実は種族のために尽しているのである。この場合、単なる幻想（Chimäre）が彼の念頭に浮かび、現実の動機の代りをするのであるが、所要の行為が終わると直ぐに消え去る。この妄想こそ本能に外ならない』。

以上を筆者が平易に再説すれば次の如くなるであろう。先ずここでいう自然とは人格化された形而上的実体を指し、後述のところでは種族の霊とか種族にあらわれる「生きんとする意志」とか表現を替えているが、結局同じ意味である。

種族（Gattung）と云へども、現象的には結局個体の集合であるから、種族の維持または発展のためには、各個体に第一次的に自己保存の本能を与える必要があるわけであり、実際にも与えられている。一方各個体は死すべき運命にあるのであるから、種族の維持または発展のためには、新生命（新生命——新個体）を創造しなければならぬ。しかし、本質的に自己保存的——利己的につくられている個体が、種族のためというふうな非利己的・一般的目的に

奉仕するわけではない。そこで種族に現われる「生きんとする意志」は苦肉の策として個体に或る種の妄想を植え込み、それによって利他的なことを利己的だと錯覚させ、事実上利他的な・すなわち種族が必要とする行動をとらせ、かくして種族の目的を達成することとした。この妄想 (Wahn——錯覚・思い違い・空想・妄念)こそ本能なのだ。

「この妄想こそ本能なのだ」^(註1)という簡潔で力強い表現における「本能」は「妄想」の上位概念と解すべきであり、本能一般の性質が適用されることになる。すなわち、恋愛(妄想)は先天的なものであり、生後の経験や学習によって修得するものではなく、したがって文化的なものでもなく、人の世と共に古いと言えるであろう。何れにしても、シヨーペンハウエルが述べている以上の趣旨は、「本質的に利己的な人間をして利他的行為をなさしめるために自然が植え込んだ本能である妄想による欺瞞」ということで、これが彼の恋愛論の形而上学的基砦であり、以下に述べられる詳論の前提原理としてここに掲げられているわけなのである。

そこで先ず、性欲満足の相手である異性の個体を選択する本能について、彼はつぎのように述べる。

『よく世間では、人類には最早殆んど本能はなく、今持っている本能は恐らく、新生児が母の乳房を求めて、これをつかまえる位のものであらうと云うけれど、実際に、われらは甚だ確定的な・明瞭な・そのうえ複雑な一個の本能を持っているのである。すなわちそれは、^{ダシネフツペフリーデック}性の満足のために、他の個体を、微妙な方法で・真面目に・自分の意志通りに選択する本能がそれである。この性の満足それ自身と——この満足を個体の切なる要求に基づく感覺的享樂である限りは、——相手となる個体の美醜とは何の關係もないのである。それ故に美醜に関して熱心に行なわれる顧慮と、この顧慮から生ずる周到な選択とは、共に明らかに選択者の関知するところではなくて(しかし選択者自身は自己の関知するところだと思っている)、真の生れ出づべきもの(子供)の関与するところである。生るべきものの中には、種族の典型が出来るだけ純粹に・また厳正に保存されていなければならぬ。』

恋愛においては、愛よりも性(肉体的結合)に重点がおかれていることは、彼がすでに実証したところであり、そ

ゲシュレツツペフリーダングの性的満足とは感覺的享受であるから、相手の美醜とは関係がない理である。それにもかかわらずこれが大きいに關心の的となるのは、それによって生れる子供に種族の典型を伝えて行く必要があるからである。その場合、美しき異性との抱擁は当事者に無上の幸福(利己)をもたらすであろうと、当事者を錯覚させて種族はその目的を達するわけなのである。その際、美しき異性の本能的選択は『美意識の指導の下に (unter der Leitung des Schönheitsinnes) されるのであるが、美意識は一般に性欲に先き立つもので、これがなければ性欲は吐き気を催すような要求となり下るのである。』と彼は附加している。

かくして、『各個人はまず第一に、最も美しき個体すなわち種族の特質が最も明瞭に現われている個体を、決定的に選択し、激しくこれを欲求する。』つぎに、自分の意志通り (eigensinnig) に選択する模様については、『第二に、各人は他の個体において、自分自身に欠如している完全さを特に要求する。その上自分自身の欠点の反対の欠点を美しいと考えさえる。例えば小さい男は大きい女を、金髪の人には黒髪のを求める。』と彼は述べる。なお、異性選択については本稿第十二節(三〇頁)乃至第十七節で詳論される。

以下本節は、異性との抱擁における「本能的錯覚(妄想)による欺瞞」が、種々の角度から再三再四波動的に繰り返して述べられ、その度毎に変曲され、シヨールペンハウエル特有の芸術的論文の旋律が流れて行くのであるが、その同工異曲的な数箇所を左に摘記することにする。

『男子が自分の心に適かなった美を有する女性を見た時、眩惑的な欲喜エントツツツケが彼を捉え、この女性との合一は無上の幸福であるように彼に思わせるのであるが、この欲喜こそ正しく種族の心 (der Sinn der Gattung) なのであって、明瞭に現われた種族的特質を認識して、これを種族の永遠のものにしようとするのである。』

『さてこの場合に人間を導くものは、実は種族の最善を目的とする本能であるが、人間自身は単に自分自身より、大きな享樂を求めていると思うのである。(中略) すなわち本能はこの場合と同じように殆んど一般の場合に、

個体を種族の幸福のために動かしめる。すなわち、一匹の昆虫が、ただそこでのみ (nur dort) 自分の卵を産むために、或る一定の花や果実や汚物やを求め、姫蜂などは他の昆虫の幼虫などを求め、この目的を達するまでは、どんな辛勞や危険をも恐れない苦心経営は、丁度人間の男が性の満足のために、或る定まった・自分の個性に適合した女性を念入りに選択し、これをものにしようと熱心に努力し、この目的を達するためには、しばしば一切の理性に反して行動し、或いは馬鹿馬鹿しい結婚により、或いは財産と名誉と生命とを賭する恋愛事件により、或いは進んで姦通または強姦などの犯罪によって、自分自身の幸福を犠牲にすることに酷似する。』

『男子を瞞着するものは淫蕩な妄想であつて、このために彼は自分の氣に入つた美を有する或る女性の腕に抱かれるなら、他のどんな女の腕に抱かれるよりも、より大きな快樂を感じるであらうと思わせられる。またこの妄想は、それが専一に或る唯一の個体に向けられると、この個体を我がものとするのが、彼に限りなき幸福を与えるだろうと確信させる。それ故に彼自身は自分の快樂のために苦勞と犠牲とを費やしていると考へるけれど、実は種族の典型を維持するためのみ、このような苦勞をするのである。』

『本能の特徴は上述の如くであるから、享樂を遂げた後では、いづれの恋人も不思議な失望を経験し、その上のように熱中して追求したのも、二人に別々な性欲上の満足より外に何物も与えないことに驚くであらう。これに反して、満足は本来ただ種族のために役立つだけのものであるから、個体の意識には現われて来ない。個体はこの際種族の意志によって激励され、あらゆる犠牲を払つて全然自分のものでない或る目的に奉仕したのである。それ故に、あらゆる恋人はこの偉大な仕事を仕遂げた後で、自分の誑かされたことを感ずるのである。これは、前にあつた妄想がこの時全く消えたからで、この場合この妄想のために、個体は種族から欺かれたものとなつたのである。それに、プラトンは甚だ適切に言つてゐる、「快樂は最大の欺瞞者なり。」と。』^(註四)

ここにプラトンが引用されているが大哲カントよりも偉大であると自負したショーペンハウエルでさえも、他人の

言説を引き合いに出して自説を強化する手はよく用いる。これを術学的エゲジテツクと見たり、あるいは自説に自信がないからと見たりするのは、いささか当を得ていないのであって、読者をして真に自説に傾倒させたいという衷心から出たものと見るべきであらう。

また恋愛論としても、恋愛を欺瞞的なものと見る系譜のあることは本論(上)の最初のところですでに述べたところであり、決してシヨープンハウエルを以て始まるものではない。例えば既述のように、謡曲(註五)「花月」外数種の日本の文献に見える「恋は曲物くせ」なども、表現は違っても思想内容は全く同様と云えよう。また「結婚は恋愛の墓場なり」なども既述のように、心理主義の立場から禁欲の有無でも説明出来るが、シヨープンハウエルの形而上学によれば、右の最後の引用文の中にあるように、「恋人同士が偉大な仕事を仕遂げた後の妄想(≡恋愛)の消滅、(日本の「惚れた腫はれたは当座のうち」)で説明出来る。その他前述のように、恋愛を「病気の種類と見たもの」や、恋愛における「理性の喪失を説いたもの」や「偉力・魔力を説いたもの」や「罪悪性を説いたもの」など、広く云って「恋愛の異常性」を説いたものは、すべてシヨープンハウエルの流れに属すると云えよう。唯これらのものと彼のものと違う点は、これらが何れも直感的な又体験的な端的な表現であるのに反し、彼のものは彼独特の形而上学的立場から究極的な体系を与えられ詳論されている点である。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1332 ff.

(註二) Dieser Wahn ist der Instinkt.

(註三) 本論(上)四五一—四六頁。

(註四) *hōron denaritarō anagōretarōn. Philob. 319 (voluptas omnium maxime vaniloqua).*

括弧内のラテン文の方は翻譯なのか、ラテン系にも別に同様のものがあるのか詳らかでない。

(註五) 本論集第五卷第三号二六頁。

(註六) 同上二三頁。

本節の前半は、本能に支配されること人間以上である動物においては、前節で述べた妄想——欺瞞の原理が、より強く当てはまるとする説明と抽写であり、次の如くである。

『疑いもなく動物もまた、彼等を欺瞞する妄想にとらわれて、自分自身の快樂のためにするのだと思つているが、実は非常に熱心に、また克己して種族のために働いているのである。鳥は巢を作り、昆虫は卵を産みつけるのに唯一の適当な場所を探し、或いはまた自分では喰べられないけれど未来の幼虫の餌として、卵の側に置かなければならない獲物を採りにすら出る、蜜蜂・熊蜂・蟻などは巧妙な巢を作り、非常に複雑な經濟に没頭する。彼等は疑いもなく妄想によって、——種族のためにする尽力に対して利己的の仮面をかぶせる妄想によって——導かれるのである。』

本節の後半はショーペンハウエルの論文独特の道草喰い・逍遙であり、それには二つある。第一は、世間でよく云われる妊婦の変態的食欲についてである。胎児の栄養關係から必要とされる食物が『妊婦には忽ち熱望の対象となつてあらわれ、かくしてここでもまた妄想が生ずるのである。故に女性は男性よりも本能を一つ多く持つている。』道草喰いの第二は、男色 (Päderastie) の簡単な説明で、彼によれば次の如くである。

『人間が動物よりも少い本能を持ち、またこの僅かな本能すらやもすれば誤導され易いということは、人間にあっては頭脳が非常に勝れている事実から説明される。性欲満足のための異性選択を本能的に指導する美意識が男色への愛着に墮落すれば、それは誤導されたのである。青蠅がその本能に従つて卵を腐敗した肉の上に産みつけることをしないで、天南星という植物の腐肉の香いに誘惑されて、その花の上に産卵するのに類似している。』

自然のからくりというものは或る程度大きっぱなものであって、末端までは貫徹しないことが起り得る一つの例であらう。「天網恢恢、疎にして漏らさず。」と言うけれども、これは道徳的世界秩序における真理であって、現象界においては、「疏にして漏らす」場合もあり得るわけである。

(註一) Edward Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1335 ff.

(註二) シューペンハウエルは、この「恋愛の形而上学」と題する第四十四章の附録として、この男色について再論している。

(註三) *Musca vomitoria*.

(註四) *Arunum draconculcus*.

十一 (註一)

本節は、すべての恋愛の基礎には生まるべき子供に向けられた本能が存在することを確証するために、男女各々に与えられた本能の解剖に入る。そこで恋愛論そのものからは少しく焦点が外れて、男性論・女性論・貞操論とでも云うべきものが展開されており、これは婦人問題の基礎知識としても必要なので先ず彼の所説を掲げる。

『先ず第一に挙げられるのは、男性はその天性上恋愛にかけては変り易い方に、女性は変らない方に傾いているという事実である。男性の愛は、それが満足を得た瞬間から著しく降下する。また、すでに自分のものとなっている女よりも、他の殆んどすべての女の方がより強い力で男を惹きつける。彼は変化を渴望するのである。これに反して女性の愛は、満足を得た瞬間から上昇してゆく。これは自然の目的から生ずる必然の結果である。自然は種族の維持をまた種族の出来るだけ大きな増殖を計っているからである。すなわち男は、丁度それだけの数の女を自由にすることが出来るなら、一年に百人以上の子供を優に作り得るのに、女はいかに多くの男を持って、一年間に(双生児は別として)一人しか子供を生むことが出来ない。だから男は常に別の女を求めるけれども、女は、さか

り一人の男を守っているのである。というのは、自然は、女性をして本能的にそして考慮を待たずに、未来の子供のために扶養者であり保護者である人（夫となり父となる人）を保持するように仕向けるからである。従つて男の貞操は人爲的であり、女の貞操は自然である。それ故に女の姦通は、客觀的に結果の上から見ても、主觀的に天性に反することから云つても、男の姦通よりもはるかに宥し難いものである。』

さて、恋愛にかけて男は変り易い方に、女は変らないように出来ていることは、學者の表現をまつまでもなく、「男心と秋の空」として広く知られていることである。ウォードによれば、アミーバのような単性生殖では増殖的な量的發展はあつても、質的な進歩發展はあり得ないところから、これに變つた遺伝子を交配して進化を図るために後になつて男性が生じたものであるから、本来男性の本質は變化（variation）や變異性（variability）にあるのである。それは、男性においては個性の變差も大きく、變化度も大であり、多くの女性と交われば多種多様の変つた子供が生れ、それによつて種族の進化が見込まれるわけなのである。この意味において、男は本来一夫多妻的であり、浮氣型であり、妻の外に妾から売春婦に至るまで各種の「女」をつくるのは、単に經濟力から来る支配力にものを言わせているだけなのではないと云えよう。それ故に、男の一夫多妻的性格を種族の量的發展だけから説明するシヨープンハウエルの理論は不充分であると云わなければならない。

一方、ウォードによれば女性には「遺傳的形質の守護者」なのである。というのは、變化は進歩であり得ると同様に退歩でもあり得るので危険である、そこで男の變差に対しては用心深い弁別眼を働かせて、種族の典型を守り抜こうとするわけなのである。しかし男を弁別して身を任せた後は、シヨープンハウエルの表現によれば「女の愛は満足を得た瞬間から上昇して行く」ことになるのであるが、この一旦身を任せた男にしがみついて放さない傾向は、シクセルも認めている。しかしシヨープンハウエルの場合は、それに対して二つの根拠（一）女は男を取り替えても生む子供の數に變りはないこと、（二）子供の扶養者・保護者をがっちり確保す必要）を挙げていることは注目すべきである。か

くして、男の貞操（結婚上の真実 *die eheliche Treue*）は反自然的であり、社会制度的（一夫一婦制度から割り出されたもの）なものに過ぎないのに反し、女の貞操は自然的でもあり、一夫一婦制度にも合致するものであるから、男の姦通はたとい一夫一婦制度に反しようとも、種族の発展に寄与するという客観性があるのに反し、女の姦通は二重の意味において宥^{ゆる}されない、というのが彼の説明である。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1336 ff.

(註二) 英諺ではじつもの通。

Men were deceivers ever.

しかし反対の「女心と秋の空」の方も、日本にも、次の通り英諺にもある。

A woman's mind and winter wind change oft.

Women are as fickle as April weather.

こうしたものは結婚上の真実が破れて相手の愛心をうらんだ体験的告白の結晶であり、五分・五分という理屈も成立するかも知れないが、一応前者をとった。但しこれはショーペンハウエルも限定をつけているように、恋愛とか結婚とか男女関係についてのことであって、道徳一般についてはまた別個の問題である。（本論集第四号三四頁以下参照）

(註三) L. F. Ward, *Pure Sociology*, 1921, p. 322.

(註四) 河盛好藏氏は浮気型と恋愛型を対蹠的なものとして両者を論じているが、それによれば日本の男は特に浮気型が多く、有島武郎氏などは例外的な少数の恋愛型の典型であった。（『新・恋愛作法』現代女性講座Ⅰ、角川書店、昭和三十四年、二五八頁以下。）

(註五) 本橋三八頁、註三。

(註六) G. Simmel, *Philosophische Kultur*, Leipzig, 1911, S. 73. 高橋義孝訳『シンメル恋愛論』玄海出版社、昭和二十八年、一二三頁。

本節以下しばらくの間は、私達が異性を選択する際に顧慮する条件の探求と詳論に入るのであるが、本節はその序論である。そうした言わば巷間のな卑近なことを哲学書で取扱うことは奇観を呈しようとも、敢えてそれをする所以のものは、彼によれば、彼が繰り返し繰り返して来た・恋愛は結局種族の靈による欺瞞に過ぎないという学説を根本的に理解し、充分の確信を得るためだと云う。哲学が単なる思弁に終らないで、私達の身辺の日常茶飯事的事実と結びついていることが、シヨールペンハウエル哲学の特異性の一つであり、これが多くの信奉者を魅惑し、心酔させている所以なのである。

さて彼の表現によれば、異性に対する喜び(Wohlgelallen)において私達を指導する顧慮条件(Rücksicht)は、次のように三大別され、それを一々吟味して行くという。

- (一)種族の型すなわち美に関する条件
- (二)精神上の諸々の特質に関する条件
- (三)相対的なもので、両個体の偏頗や異常に対する相互に必要な修正や中和をもたらす条件

(註) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1337.

十三(註)

本節は、前節で述べた顧慮条件の(一)種族の型すなわち美に関するものの中で、男性側から女性を見る場合の条件だけを説明する。事柄の性質上、巷間にも知れわたっていることが多く、従って敘述も解りやすく格別説明の要もないのであるが、シヨールペンハウエルは哲学者であるから一々の事に根拠を附けているので、その根拠に重点を置いて、それから日本で余り問題にされていない点などに触れて、一応略述してみることにする。

最高の考察条件は年令である、と彼は云う。日本でも、縁談などで最初に問題にされるのは年令のようである。彼によれば、メンスの初潮から閉止までの期間がそれに該当するわけだが、『その中でも十八才から二十八才までの間が特にすぐれて喜ばれる。』という。これは上眼が日本より少し高いようである。さらに続けて彼は云う。

『年老いた即ち最早メンスを見なくなった女は、われらに厭氣いんげきを起させる。若い女は美人でなくとも、いつでも男を惹きつけるものを持っていては、若くない美人は何等の魅力がない。この場合無意識的にわれらを導いて行く意図は、明らかに生殖の可能性である。だから一切の個性は、生殖または受胎に最も適する時期を遠ざければ遠ざかる程、いよいよ異性に対する魅力を失うものである。』

哲学というものは分り切ったことに理屈をつけるだけのことだと思われる面を多分に持つのであるが、以上も以下本節の敘述もその感が深い。以上は誰よりも女性自身が最もよく知っていることで、中年以後の女はとかく自分の年令を隠かくそうとかかることによく現われていると思う。同じことを別の面から、スタンダールは次のように述べる、

「年とった女は、恋を感じたり感じさせたりすることが出来ないからと言って不憫いんがられるのだ。」（「パルムの僧院」）

第二の考察条件は健康である。彼によれば、慢性病や悪液質の病気が私達をいやがらせて退とかせるのは、このような病気が子供に遺伝するからである。

第三の考察条件は骨格で、彼によれば、種族の型の基礎をなすからである。彼の所説から以下要点だけを引用する。

『不恰好な容姿ほどわれらを嫌きらむせるものはない。どんなに顔が美しくとも、この欠点を補うことは出来ない。むしろ顔がどんなに醜みにくくとも、すらりとした姿を持っておれば、その方が疑いもなく好かれるのである。』

『これに関連するのは、われらが小さい足を喜んで、これに高い価値を置くことである。（中略）このことはまた、人間が直立して歩行出来ることに関係があるので、足の小さいのは人間という種族の本質的特徴の一つだから

である。』

つぎに、旧約聖書外典『ベン・シラの智慧』から次の言葉を引いて自説を強化している。「姿がすらりとしていて、足の美しい女は、銀の台に立てられた黄金の柱のようだ。^(註二)」骨格の最後は函で、彼によれば、函も重要であるのは、栄養上必要であるのと、特に全く遺伝的なものだからである。

第四の考察条件は、或る程度まで肉、附、^{ライツ}き、の豊か、な、こと、(Fülle des Fleisches)で、これは胎児に対して豊かな栄養を予約するからだという。さらに彼はいう、「女性の豊かにふくらんだ胸は男性に対して非常な魅力^{ライツ}を及ぼす。そのわけは、これが女性の生殖機能と直接に関連しており、新生児に対する豊かな栄養を予見させるからである。』反対に肥り過ぎの女が、われらに嫌悪の情を催させるのは、彼によれば、このような体質が子宮の萎縮・不妊を示すからである。しかし、それを知るのは頭脳 (Kopf) ではなくて本能 (Instinkt) だと云っているのは、注目すべきである。

肉体的方面の最後の考察条件は顔の美しさである。顔の中で何よりも重点がおかれるのは鼻であり、それは骨格に關係のある部分であるからだと言う。「クレオパトラの鼻が……」と言うから矢張りそうなのであろう。彼によれば、『上向きに或いは下向きに少しく曲った鼻は、これまでに無数の少女の一生の運命を決定した。』のである。しかし、これも種族の型に關することだから仕方がないのだと云う。つづけて彼は云う、『小さい顎骨によってできた小さい口は、動物の口に対して人間の顔の固有な特質として甚だ重要なものである。』最後は、眼と額の美しいことで、彼によれば、これは心の特質に關係し、特に母から遺伝する知力の特質に關係するからである。

以上本節のシヨーパーンハウエルの所説は、人類種族の人形のような典型を想定して、それから外れているものは皆駄目だと千篇一律に決めつけているさらいがないであろうか。彼の所説の限りにおいては皆真理を伝えているでもあろうが、異性に対する魅力とか美とかが、唯一つの典型・観点からだけで割り切れるものであろうか。例えば、美は愛が創造するとも云われるし、美人の標準は時代によって変っているとも云われているし、また人間においては一人

一人が独特の個性を持つように肉体的にも個性美があるとも云われる。兎に角、魅力とか美とかは肉体的方面に限定するとしても、一つの典型からだけで割り切られてしまうような・型にはまった・ぎごちないものではなく、もつと多動的な・各要素間に相関関係や緩のある・そして心の美しさとも密接の関連をもつて現われて来るものなのではあるまいか。^(註1)

(註1) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1337 ff.

(註2) 第二十六章第十八節。ギリシャ語訳の名称は『シラクの子イエスの智慧』であり、作者シラク (Jesus, Son of Sirach) は紀元前二世紀の人で多分エルサレム生れの学者であつたらうと云われている。

(註3) Handsome is that handsome does. (心美しき者は姿もまた美し)

十四 (註)

前節が、異性選択の考察 (＝顧慮) 条件の (一) 種族の型即ち美に関するものの中で、男性側から女性側を見る場合の条件の説明であつたのに反し、本節は逆に女性側から男性側を見る場合の条件についてである。これについては、シヨーペンハウエルは自分が男であるから無論詳細には述べられないが、大体において次のことが言えるとしている。

『先ず女性は、男性の三十才から三十五才の間を特に選びたがる (元来最高の男性美を現わすのはそれよりも若い年令であるにもかかわらず)。そのわけは、女性を導くものが趣味^{ゲシュマック}ではなくて、本能であり、本能が、上述の年令において生殖力の頂点にあることを見て取るからである。一般に女性は男性の美とくに顔の美には余り目をくれないもので、それは恰かも美を子供に伝えることは、女性の方だけで引き受けているかのように見える。主として女性の心を捉えるものは、男性の力 (Kraft) とそれに関連する勇氣 (Muth) であり、そのわけは、この二つが強い子供達を生み得ることと、同時に子供達の勇敢な保護者となることを約束するからである。男性の肉体的欠点と

か型は、ずれとかいうようなものは、女性自身がそれと同一の欠点がないか、又はそれと反対の部面で秀れておれば、女が子供をつくる時にそれを排除し(aufheben)得るものであるから、子供に伝わる心配はないのである。しかし、男性特有のもので母が子供に伝えることの出来ないものは、そういうわけには行かない。例えば、骨組みの男らしい結構・広い肩・狭い腰・真直な脚・筋肉の力・勇氣・髭ひげなどである。そこで、女がしばしば醜い男を愛することはあるが、決して男らしくない男を愛することはないのであって、それはこの欠点を女が中和することが出来ないからである。』

以上は現代の日本女性の観点とは幾分違うかも知れないが、男の書いたものであるから、彼の主観ではなく当時の西欧社会の客観的事実を述べたものとみてよいであろう。男性を選択するについてのそうした社会事実を生んだ根源は、女性の本能による感知なのであり、その本能を支配するものは生れる子供への遺伝と子供の良い保護者であることだとするのが、彼の一貫した論法なのである。

(註) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1339 ff.

十五(註一)

本節は、異性に対する恋着と選択を指導する条件の(二)精神上の諸特質に関する条件(本稿三〇頁)について述べる。この条件については男性側・女性側を一括して論じている。先ず注意すべきことは、シヨールペンハウエルがこれまで述べて来た形而上学的論理の他に、本節では、意志(性格)は父から遺伝され知力は母から遺伝される、換言すれば子供の心は父の意志プラス母の知力で構成されるという彼の遺伝学的持論(註二)が、一貫して加味されていることである。その持論の眞理性を批判することは専門外に属するので、ここではそれを与えられた前提として論を進めて行くことにする。その持論の上に立って彼は云う。

『性格は父から伝わるものである。女性の心を捉えるものは、主として意志の強固・決断力と勇氣であり、恐ら

くまた誠実とか心の優^{やさ}しさとかであろう。これに反して、知力上の優秀は女性に対して直接的な本能的な力を及ぼさない。それは父から伝わるものではないからである。』

彼によれば、男の知力の優秀は、女の目から見て少なくともプラスにはならない。彼は、この理論で、常識的には不思議に思える男女関係の実例を次に挙げて説明している。例えば、男の卓越した精神力^{ガイステスクラフト}とか天才のようなものは一種の変態として好ましく思われ^{許さ}れない。また醜^{みにく}く・愚かな・粗野な男が、教養のある・心の豊かな・愛すべき男に勝つて、女の愛を占領することがしばしばあるのも、男の知力が買^かわれないで、外の点が魅惑的であつたからである。つぎに『愛情から出た結婚が、精神的に全く性質の違う人々の間になされることが時々ある。例えば、男が粗野で・力強く・視野が狭く、女が感じが優しく・考えが繊細で・教養があり・審美的な場合とか、男が天才であり学者であつて、女が愚女である場合などが、それである。』と彼が実例を挙げてゐるのも、男の知力が問題にされないで、他の点で男女が結ばれた証拠なのである。最後の学者と愚女^{ガンス}の場合も、学者の知力が買^かわれたのではなく、その学者の性格的(意志的)なものが惹きつけたとか、その愚女が美女であつたとか他の関係によるわけなのである。ショーペンハウエルは、以上の自説を第三者によつても権威づけようとして、つぎに著明なローマ詩人の詩句を掲げている。これがまた彼の哲学論文特有の芸術的な綾ともなつてゐる。

形も心も似つかぬ人々を残酷に戯れつつ、

堅^{かた}きくびきの下に送ることを好める

恋^{アイトナス}の女神がそれを欲したのである。

Sic visum Veneri; cui placet impares

Formas atque animos sub juga aenea

Saevo mittere cum ioco.

ここに一つの恋愛観・結婚観が紀元前のローマ大詩人の口を藉りていみじくも語られていると思うので、つぎに別訳をも掲げる。

かくヴィーナス女神は欲したり、その者は

残酷に戯れて相異なる姿及び性質をば

青銅の軛の下に置くを好む者なり。

「恋(愛)の神」の表現として、右の詩句ではヴィーナスが用いられているが、シヨープンハウエルは後の箇所でも度々クピード (Kupido 英語の Cupid) を用いている。これらの神は彼の哲学用語によれば「種族の意志」(der Wille der Gattung) に相当するもので、彼は場合場合の表現のニュアンスによつて「自然」(die Natur) または「自然の意志」(der Wille der Natur) と言ったり、後の方で種族の靈 (der Geist der Gattung) と言ったり、種族の守神 (der Genius der Gattung) と言ったりしているが、何れも同一の形而上の実体に与えた名称で結局は同義語である。

以上の、女を惹きつけるのは男の知力ではなく性格だとか、男を惹きつけるものは女の性格ではないとかいう所説は、現代の縁談・結婚などの場合の実際の考察条件にも反し承服出来ないとする読者もあるであろう。このことについてはシヨープンハウエルは本節の最後で誤解を避けるために注意を与えているが、読者の理解を助けるために便宜上ここで述べることにする。すなわち、本節は真の恋愛(ここでは惚れ込み Verliebtheit) が発生する直接的・本能的引力を論じているのである。理知的な・教養のある婦人が男子の知能や才智を重んじたり、男が理性的熟慮によつて結婚の相手の女の性格を考察したりするなどの、理性的選択が結婚を成立させる場合は本節の問題外だ、と彼は云う。つまり、そのような理性的選択が結婚を成立させることはあるにしても、そこから真の激情的な「惚れ込み」は生れないと云うのである。

既述の、最後には詩まで引用して述べられた、外見的には不似合な一連の男女関係が成立する理由は、彼によれば

理性的な考察条件とは全く別な本能的な考察事件の方が有力に支配するからである。そこで結婚について彼はつぎのように述べる。

『結婚の目的は、夫婦が才智豊かな談話を交すためではなくて、子供をつくることである。結婚は心情の結合で、頭脳コグニツフの結合ではない。』

話し相手としての女を求めようとするこの愚を説いたのはシヨーパーンハウエルをもって始まるのではなく、遠く紀元前のギリシヤの悲劇詩人ソフォクレスが「女性は見るべきものにして、聞くべきものにあらず」と述べて、これを教えている。ここでシヨーパーンハウエルが説く結婚とは本能的な——つまり恋愛結婚であり、種族の意志に合致した結婚であり、さらに言えば宇宙の存立目的に合致した結婚である。しかし人間の理性的選択による結婚ではなく、すなわち頭脳の結合ではないので、話し相手にはならない結婚であり、当事者同士にとっては言わば不幸な結婚である。その典型としてシヨーパーンハウエルは、ソクラテスとその妻クサンティッペ (Xanthippe) との周知の結婚を挙げ、さらに著名な実例として、沙翁・デューラー(註六)・バイロンを挙げている。知力は母から遺伝するものだから、この場合女の知力は勿論本能的に作用するのではあるが、肉体美の方がより重要な点(種族の型)に触れて、もっと直接に作用するので肉体美に圧倒されてしまうことが多いのだと云う。世間の母親たちが自分の娘に美術や語学などを修得させたり、娘のお臀しりや胸つめものに詰物つめものまでして型をととのえたりする理由が、ここから説明される。つまり、母親たちが男を魅する力は女の知力と肉体美であることを直感的に感じたり又は自分で経験したことによって、自分の娘のその方面を補強しようとする人工的手段だといっているのである。

以上の所説から、真の恋愛は本能的なものであり、それによる男女の結合は種族の意志——ひいては宇宙の意志に従属するものであることを知った。他面、こうした結婚が話し相手にならない、つまり相互の精神的幸福をもたらさない結婚(典型はソクラテス)であることもすでに述べた通りであるが、さればといって例外的な結婚なのではな

く、シヨールペンハウエルによれば、これが結婚の本筋なわけである。この本筋から離れたものとしての情実結婚・金銭結婚・政略結婚などはまた別として、これを人間の自由意志で克服しようとする近代的な試み（つまり種族の意志への反抗）が、今世紀のフェミニストたち^{（註七）}の結婚観であるといえよう。彼等は、夫婦関係の中で性関係よりも伴侶関係^{コンパニオン}——頭脳の関係——話し相手の関係を重視し、強調する。これは結婚を当事者双方の人間形成・幸福に奉仕させようとするものである。このような結婚関係の成立の可能性は、すでに述べたようにシヨールペンハウエルも認めているのであるが、それは理性による本能の支配力の程度にかかり、知的特権階級の業^{わざ}であると云えよう。

（註一） Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1340 ff.

（註二） この持論についてはすでに述べた。（本稿一七頁）

（註三） 人類の進化のために、両性の結合における男性の変化とか変異性が必要とされ、存在しているわけなのではあるが、無制限の変化は危険であるので、種族の遺伝質の守護者である女性は、そうしたものを選択しないと、ウォードも述べている。（L. F. Ward, Pure Sociology, 1921, p. 325.）平易に言って、女は常識人を好み「変り者」を好まないのである。

（註四） ホラティウス (Horatius, 英 Horace, 65 B. C—8 B. C.) 終生独身であったこともシヨールペンハウエルと同じであることに注意する必要がある。

（註五） 田中秀央外編著『ギリシヤ・ラテン引用語辞典』岩波書店 昭和十二年、七一六頁。

（註六） Albrecht Dürer (一四七一一—一五二八) ドイツの画家・彫刻家。北欧的・ドイツ的な美の伝統を築いた画家として、ドイツでは文学におけるゲーテと並称されているようである。

（註七） シュライナー (O. Schreiner) キルマン (C. P. Gilman) など。

第十二節から前節までは、異性に関する好愛・選択における絶対的考察条件すなわち何人にも当てはまる条件を研究してきたが、本節では個人対個人の相対的考察条件を論じている。このような考察条件においては、種族の型が完全に現われているのを改良したり、選択者自身にすでに現われている種族の型の歪みを訂正し純正な型へ還元させたりするのが、その目的であると云う。そこでこの場合の選択の原則を彼はつぎのように述べる。

『そこでこの場合には、各人は自分に欠けているものを好愛する。このような相対的条件に基づく選択は、個人的性質から出て別の個人的性質に向けられたものであるから、単なる絶対的条件から出たものに比べて、はるかにより、限定的で・より、明確で・より、排他的である。だから、真の激情的な恋愛の源泉は、この相対的考察条件のうちにあるのが普通であり、絶対的考察条件からは普通の・軽い好愛が生ずるだけである。そこで強烈な激情に火を点ずるものは、型通りの・完全な美ではないのが普通である。』

世間によくあることであるが、現に一つの恋愛事件が起きているとき、第三者の目から見ると、あの男のどが良く、あの女のどが良いのであろうかと不思議に思えることがよくあるが、その不思議が右のショーペンハウエルの説明でよく解けていると思う。

つぎは相対的考察条件の細論であり、その第一は男女の性そのものが元来アインザイテヒカイト一方に偏していることから来るその中和へ向うことであり、彼はつぎのように説明する。

『元来性なるものは一方への偏性であって、この偏性は、或る個人においては他の個人におけるよりも、一層明確に高度に存在するから、どの個人にとって、自分の偏している点を補ない中和するには、異性中の甲よりか乙の方が一層適しているということになる。そうして、新個体(新生児)の性質如何が常に万事の目標となっている

から、その新個体において人類の型を補正するためには、何人も自分の偏性とは反対の偏性が必要なのである。(中略)そこで二個の個体が相互に中和するために必要なのは、男の側の男性的性質の度合いが女の側の女性的性質の度合いに適合して、そのために、両方の偏性が互いに消し合うことである。であるから最も男らしい男は最も女らしい女を求め、その反対に、男らしくない男は女らしくない女を求めるし、最も女らしい女は最も男らしい男を求め、女らしくない女は男らしくない男を求める。』

つぎに、右の場合必要とされる男らしいとか女らしいとかの程度は二人によって本能的に感知されるのであり、これが他の相対的考察条件と共に、一層高い恋着の根源となる、と述べている。この場合相愛の二人は、二人の魂の調和ハモニーといって、感傷的に語るのではあるが、事柄の本質は生るべき子供とその完全性から見ての調和なのであり、この魂の調和なるものも結婚当時のことで、間もなくひどい不調和に変わって行くことがしばしばある、とも述べている。これは平易に言えば、恋愛結婚の多くは不幸に終わるということであり、それはショーペンハウエルが後節で詳論するところである。

つぎに、以上の両性の本来の偏性から来る考察条件以外の諸々の相対的考察条件の説明に入るのであるが、先ずそれら諸条件に共通な基礎原理を彼はつぎのように説明する。

『その条件は、各個体がその弱点・欠陥・型外れかたはずを、それらが生るべき子供に宿って永久化したり、全く変態になつてしまふことのないように、克服しようとするという事実に基づくものである。』

その一例として、筋肉の力の弱い男は力強い女を求めるし、女の側でも同様な要求が行われることを挙げている。しかし女は力の弱いのが自然であり、普通でもあるから、女が一般に力の強い男を好くのが普通であると言っている。

つぎの相対的考察条件は身体の大小である。小男は決定的に大女を好み、小女は大男を好く関係である。大女が大

男を嫌うわけも上述の中和の論理から容易に理解されるのであるが、それにもかかわらず大女が社交場裡の見栄などから大きな夫おつとを選ぶならば（理性的選択）、その愚行を子孫が償なうだろう、と述べている。

つぎの相対的考察条件は肌色である。日本では「色の白いは七難隠す」と言つて、白色の肌は大変要望されているのであるが、これについてのショーペンハウエルの所説は私たちに教示するところが多いと思われるので、その全文をつぎに掲げる。

『白い肌色の人は、黒または褐色のものを要望するが、後の二者が前者すなわち白色を要望するのは稀れである。その理由は、金髪と碧眼（と白面）とは、たしかに一つの変種シネモルケルト——否ほとんど変態アップリヤチート——を構成するもので、白鼠少なくとも白馬に似たものである。白色人は欧州以外いかなる所にも土着的アインハイミツシュでなく、極地に近いところにすら生れていない。ただ欧州にだけ土着的なもので、明らかにスカンジナビアから発源したものである。序にここで私の所説を述べるが、一体白い肌色は自然なものではなく、人間は本来、われらの祖先の印度人のように黒いかまたは褐色の肌色のものであり、従つて白色の人間が原始的に自然の懐ふところから出たことはなく、白人種という言葉は随分口にされるけれど、実は白人種という人種はなく、すべて白色人は緋色アネグクリフエネーしたものである。自分の不慣れた北地へ押し込まれて、そこで外来植物のように生存し、これらの植物のように温室を必要とし、幾千年か経つうちに、人間はとうとう白色になつたのである。約四百年前に欧州へ移つて来たツイゴイネル（英語で言うジプシー）は印度人種の一つであるが、それは今や印度人の肌色から欧州人の肌色への過渡状態を示している。それ故に自然は、恋愛を通じて、原型ウルチナスである黒髪と褐色の眼とへ帰ろうと努力するけれども、白色の皮膚は第二の自然になつてしまつた。それでも私たちは印度人の褐色の肌を見ても格別厭いやな感じもしない。』

日本人の中にも人間の肌色は本来「小麦色」だと言う人もあり、以上のショーペンハウエルの所説は真理であるようにも考えられるが、これ以上探究することは学としての「婦人問題」の直接の分野から外れるものとして割愛する。

つぎは各個人の身体の一部の欠点や型外れから来る考察条件で、それについて彼はつぎのように述べているが、その論理は前と同様で理解も容易である。

『身体の一々の部分においても、各個人はその欠点と型外れはずとを矯正しようと努める。その部分が重要であればあるだけ、その努力は一層激しい。それ故に獅子鼻の人は鷹のような鼻や鸚鵡おうむのような顔を見ると、口では言い切れない好ましさを感ずる。他の部分についても同様で、過度にひよろ長い構造の体からだや四肢をもつものは、不相当に縮まった・短かい構造の身体をすら美しいと見るものである。』

つぎは、氣質テンペラメントについての考察条件で、その論理も前と同様で各人は自分と反対の氣質を好むのだが、その程度はその人の氣質が判然と明確である度合いに應ずると云っているから、例えば極端に憂鬱であることがはっきりしている人は、極端に明朗な異性を好み求めることになるわけである。

最後は相対的考察条件についての云わば附論である。ある点で完全な人が、これと同じ点における不完全な人を求め・愛することは勿論ないが、他の人々に比べて、この点を容易に気にしないでいることが出来る。そのわけは、その点における大きな不完全が子供に伝わることを自分で防ぎ得るからだと言ふ。また男が非常な醜女を恋することも稀にはあるが、そのわけは前述の男らしさ、女らしさがきちんと調和するようになっており、女の偏性の全部が自分のものと正反対になっていて互に矯正するようになっていからであり、しかもこの種の恋は通常高度に達すると云ふ。

(註) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1341 ff.

A Study of Schopenhauer's "Metaphysics of the Sexual Love" (II)

R é s u m é

According to Schopenhauer, the new individual which might be begotten of two lovers is, as it were, a Platonic idea, the eagerness and impetuosity of which is revealed as the passion of the two lovers; the intensity of the passion corresponds to the measure of its individualization.

According to him, the sexual love is the instinctive illusion which Nature implants in the minds of the persons concerned, in order that they may, in spite of their fundamentally egoistic nature, perform, obsessed by the delusion, an altruistic act serving in reality to the development of human species.

According to him, the sexual nature of male is appropriate to polygamy, and the one of female, on the contrary, to monogamy; therefore the adultery of the latter is more blamable.

In the next place, he states the various aspects of consideration in selecting the object of sexual love, dividing them broadly into three categories, ie, (I) the one touching upon typical and corporal beauty of human being, (II) the one directed to the psychical attributes of the object, (III) the one, which is relative, needed for the mutual correction or neutralization of the partiality and abnormality of the persons concerned.